

第三講 レバントにおける農耕文化の誕生

【レポート講評】：オリエントの地が高温・乾燥という気候条件に言及するレポートが多かった。しかし同時に、地中海性気候の地や寒冷な高地性気候の地もオリエントに見られることに言及するレポートもかなりの数にのぼった。受講者の多くが、オリエントが砂漠というモノトーンの世界ではなく、多様な世界であることを理解しているように思われた。

【レポート課題】：人はなぜ食糧を生産するようになったのか。

氷河期の西アジア

レバノン山脈 - タウロス山脈 - ザグロス山脈：

傾斜面：カシ・ピスタチア・オリーブ・イチジクなどの灌木林

高地：マツ・イトスギ・レバノンスギなど

内陸部：

草原：アカザ・ヨモギ属

中間帯：カシ・ピスタチア・アーモンドなどの疎林帯

10,000BP：気温の上昇と乾燥化

森林の縮小とサバンナの拡大

身近にある野生種の動植物を利用：麦（森林周辺のステップ）・豆・ヤ

ギ（山岳地帯）・羊（草原）・豚（森林の入口）

レヴァント地方で早く体系的な穀物利用の試みが始まる。

↑

自然環境の変化が生じている

樹木花粉値が 50%を超えるのが

パレスティナ（フーレー）：11,540 ± 100BP

シリア西部（ガーブ）：10,080 ± 55BP

ザグロス（ゼリパール）：5,460 ± 120BP

↓

森林の出現を表すが、森林の卓越期間は 2~3000 年間

西アジアにおけるムギ・マメ類および中型群生草食動物（ブタ：森林、ヒツジ：草原、ヤギ：山岳）への依存を強めた人間集団の存在
牧畜は農耕よりも二千年ほど遅れて発生

先土器新石器時代（PPN：1.03-0.8 万 BP）

尖頭器で識別

先土器新石器時代 A 期（PPNA：1.03-0.96 万 BP）

竪穴住居から方形プランの地上型住居へ

石核と押圧型剥離技法の出現

大型尖頭器

先進的な鎌刃、磨製石斧、石皿、土偶、土器

先土器新石器時代 B 期（PPNB：0.96-0.8 万 BP）

レバント全域に拡大

北シリアの湿潤化による大草原地帯にナトゥーフ人は着目、利用

テル=アブ=フレイラのナトゥーフ期、先土器新石器 A および B 期

ナトゥーフ期（中石器時代：1.1-1.03 万 BP）：157 種類の可食性植物
種子

30 種類以上のイネ科、21 種類以上のマメ類

それらの中にコムギ、オオムギ、レンズ豆など重要な植物が含まれる

PPNA（新石器時代：1.03-0.96 万 BP）のムレイビットⅢ層

（9600BP）・・・北の草原地帯

湿潤化（フーレー湖 花粉帯 A-2）

コムギとオオムギ（野生種）が 1 - 2%から 60%に増加

↓

特定の野生種の植物に依存し始める（人間による選別）

PPNB（新石器時代：0.96-0.8 万 BP）・・・北部シリアからレバント

全域に拡大

資料 3 下：乾燥化 フーレー湖 花粉帯 B

5種類の栽培種のイネ科（70%）と3~4種類のマメ科（15%）
に依存

ヒツジやヤギの中型動物の家畜化



レンガ瓦や石による方形プランの住宅

10ha以上の小都市の形成

175人/1ヘクタール→1750人以上の小都市



森林破壊の進行

10.000BP（プレボレアル期）よりの乾燥化の進行

草原地帯の可耕地の減少→農耕文化の行き詰まり→都市
の形成→強制的な土地利用



パレスティナの空間的限界

参考文献

常木 晃「西アジア型農耕文化の誕生」『講座 文明と環境』3、
朝倉書房、1995年。